



照るや降るや土用布子の夜となりぬ
 ヤングケアラ一金魚に話しかけてをり
 杜若死後のことなど考へず
 暴れ観音怪しうて可笑しうて
 峰雲の崩るゝごとく妻逝けり
 川暮れて空まだ暮れず火振舟
 母に背く夢を見し朝花ダチュラ
 逝く人の影を撫でゆく踊かな
 姥百合や耳伸ぶるほど好奇心
 シュレッターに吸はれゆく紙広島忌
 身を入れてぐし縫しごきゐる猛暑
 夏草やホームに疲れたる電車
 *
 敗戦忌星ぞろぞろと海にゐし
 夏の日や木影に遊ぶケンケンパ
 とうすみの飛ぶぎりぎりの翅づかひ
 穂苺真泉
 山岸俊一
 上村敦子
 高松正明
 阿部萌子
 佐藤由美
 平澤寿美枝
 高橋節子
 宮島英子
 垣内みか
 倉科繁登
 栗原利代子
 宮地良彦
 奥山源丘
 国見敏子

休暇明マッチのやうな教師立つ
 気が触れしごとく蚯蚓の飛び跳ぬる
 螻蛄におを付けてオケラと尊ばれ
 現るは現るは車の骸むくろ出水後
 エスカレーター木乃伊を運ぶ如く夏
 夜濯のけはひ誰かのをるらしき
 好きなものだけしか見えぬ花石榴
 立ち雲や B 29 に 燕 魚
 ボディービル女子の三夏の筋肉美
 薔薇真紅核のボタンも真紅かも
 立秋や母の肌着の小さかり
 *
 ポウリングのピンを弾きて夏休み
 花びらの奥に隠るる青蛙
 白桃の毛細血管のくれなる
 不時着の如く日陰に油蟬
 岩上諒磨
 海野良三
 西澤日出樹
 山田一政
 松岡節子
 許勢元貞
 添田朋子
 柁木幸子
 諏訪坂恵子
 名取朋子
 下平重人
 関 礼子
 春原美恵
 高瀬かず枝
 蔵之内利和

——同人集・岳集・青雲集から

巻頭寸言 燃える九月。世界ばかりではない、自然も燃えている。殺し合う戦況は膠着状況。それをあざ笑うように、各地で地震、山火事、集中豪雨。このようなときはほど、気持を落ち付けるために、俳句に向き合いたい。生活とはなにか。俳句とはどんな文芸か。原点に立ち返って考えてみたい。

土用布子の夜とは——暑い最中に綿入れを纏うこと。不思議な句。

照るや降るや土用布子の夜となりぬ 国見 敏子

かんかん照りから途端に集中豪雨。急に寒くなることがある。世の中どうなっているのか。人間が貯えてきた僅かな知恵も効かなくなった。自然の変動で、人間が翻弄されるさまを身近に感じ出した怖れ。「土用布子に寒帷子」の諺のように、自然が狂い出し、秩序が崩れ、無益、無意味なことが増えてきた。

ヤングケアラ一金魚に話しかけてをり 奥山 源丘

大人がやる介護や看護や家事などを子どもがやる。そのために学校にも行けない。五歳の弟の世話をし、母の看護。柱になる父は蒸発。金魚が僅かな癒しの相手とは。

暴れ観音怪しうて可笑しうて 栗原利代子

先年、「暴れ観音」を見た。祇園祭の後祭、七月二十四日

母を泣かせる。辛抱する親。古来これは一つのパターンであるが、親を泣かせて子は育つ。私が大きくなった戦後の時代は家も社会も食べるにやっと、反抗さえもできなかった。

逝く人の影を撫でゆく踊かな 高橋 節子

踊りの場で思いかすめるのは逝く人のこと。矛盾である。これくらい残酷さを抱えて生きている。切ない。だが楽しくて楽しくて踊っているものか。あの人にもう一度盆踊を楽ませてやりたかった。心で泣いて踊っている。

姥百合や耳伸ぶるほど好奇心 平澤寿美枝

日陰に咲く姥百合はこういう花だ。私の好奇心旺盛さを詠みながら姥百合も同じと気づく。感度がいい。

今月の秀句

杜若死後のことなど考へず 宮地 良彦

百歳を目前に、毎日、死後のことが気になってもおかしくない。気になることは当然あろうが、こう言い切ることができているのが凄い。生きる気力がびんと張っている。なにが怖ろしいといってノイローゼ、くよくよである。それを断ち切る最良の方策は俳句を作ることだ。

私は、百歳にはいくぶん時間があるが、初めて老いを実感をもって言える年齢になってきた。私がいえるのは俳句の効用である。ことばを動かすことは最高の健康法である。

の宵山にあたる、二十三日深夜十一時、祇園の鉾の一つ、南観音山の暴れ観音(楊柳観音)がミイラのように黄色い布で巻かれ、担がれ、町内を三往復するのにつきあった。本番の日には静かにしてもらうように予め暴れさせるといふ解釈が可笑しい。祇園祭には本来怨霊鎮めの理屈があるろうが、拡大解釈が怪しく、可笑しいものだ。

峰雲の崩るゝごとく妻逝けり 倉科 繁登

六月に奥方を八十歳で亡くされた。繁登さんは高等学校の校長先生。多分、家のことは全て妻任せ。こんなはずではなかったと生活設計が狂ってしまったものであるろう。「峰雲」と妻に捧げたことばの比喩が落胆の深さを暗示する。

川暮れて空まだ暮れず火振舟 垣内 みか

四万十川の夜の鮎漁見物。河口の沖合の空はまだ明るさが残る。松明の火を振り、鮎を手元に誘い込む。スケールが大きな夏から秋に掛けての楽しみ。風景に作者の気持が籠る。単なる風景句ではない。私のいう〇・五の自分が託されているすぐれた作だ。

母に背く夢を見し朝花ダチュラ 宮島 英子

「ダチュラ」(朝鮮朝顔)の花の頭でっかちな垂れ具合。寝汗でもかいたものか、後味が悪い。気合いの入った若者ほど

シュレッダーに吸はれゆく紙広島忌 佐藤 由美

なんでも臭いものは消せでは世は動かない。世の矛盾に気づきながら吸われてゆく紙の哀しみが詠われている。中には貴重な保存文書もあるろう。広島は怖ろしい核の代名詞。消せるものではない。

身を入れてぐし縫しこきめる猛暑 阿部 萌子

「ぐし縫」とは串縫い。魚に串を挿すように縫って、ぐいと引く。暑い最中の過ごし方としては最高。知恵がある。

夏草やホームに疲れたる電車 高松 正明

走って走って疲れた夏の電車。夏草が生える田舎の駅のホームに一休み。電車の気持になっている。感受性が初々しい。〇・五の気持を無機質の電車に向け得る、学校の先生。

雪嶺集・前山集から推薦候補作をあげる。

流木を焚いて始まる川	黒沢 孝子
乾びたる蚯蚓数多や	原田 宏子
向日葵の潜望鏡のごと	山口 洋子
炎天下我が分身の影が	滝澤 あや
歩き巫女の墓石ごろ	太田 継子

ケンケンパ遊びをおぼえていますか

夏の日や木影に遊ぶケンケンパ 山岸 俊一

その遊びを「ひんがら」、あるいは「ちんがら」といった。片足飛びである。今はカラフルな輪で自在に遊ぶケンケンパ

が流行っているようであるが、懐かしさを呼び込む穏やかな句調が作者のセンスの良さを思わせる。もう少し多作を期待したい。東京芸大出の優れた建築家だ。

とうすみの飛びぎりぎりの翅づかひ 上村 敦子

川面すれすれに飛ぶとうすみ蜻蛉。翅づかひに音が聞こえるほど翅をばたばたさせる。これが生きてくる姿だ。蜻蛉も一様ではない。生きものへの理解が懇ろだ。

休暇明 マッチのやうな教師立つ 岩上 諒磨

「マッチ」はマッチ棒。先生もお疲れ。休暇明はだるい。先生もぼーっと教壇に立つ。次のことを考えて。火の付き方が遅いかな。生徒の方が鋭い。これはどこの領域も同じ。

気が触れしごとく蚯蚓の飛び跳ぬる 海野 良三

猛暑は蚯蚓にも響く。アスファルトに出た蚯蚓が大変。人間は気が触れる。蚯蚓もというのに愛情がある。

今月の秀句

敗戦忌星ぞろぞろと海にゐし 穂苅 真泉

「星」とはなにか。星条旗の星か。生きものの星のようだ。敗戦の日に違和感をもって振り返るならば、こういうことであろうが、当時これだけの余裕を抱いた者は極めて少ないであろう。やはり後日の連想になるうか。社会的関心がいい。着実に力をつけてきた。熱心である。いよいよ、活躍手の一人。

周りは熱帯魚の魚礁になっていたとか。燕魚は燕が羽を広げたように背鰭や腹鰭が長いマンジュウダイ科の魚。海上には立雲（入道雲）が出ている。貴重な体験句である。

ボディービル女子の三夏の筋肉美 諏訪坂恵子

関心の対象が個性的で惹かれる。春には露の臺を下さった細身佳人の作者が肉体美隆々のボディービルの女子を紹介。暑い暑いとほざく俗人とは違い、一念発起し筋トレに打ち込み、肉体美を獲得したか。ご本人かどうかは知らないが、かくの如し。これも俳句。魅力がある。山あり川ありだけが俳句ではない。

薔薇真紅核のボタンも真紅かも 名取 朋子

連想がプーチンにまで及ぶのが自由自在。薔薇を悪女風に変身させるところに才あり。句には、大らかな迫力がある。

立秋や母の肌着の小さかり 下平 重人

母親思いのナイーブな作者らしい着眼の作。干されたものか。心の琴線に触れる。学生俳人の作者が高校の英語教師になり、六十歳、定年を迎えた。「岳」をとり俳句を続け、ここに復帰。変わらない。なんと純情なことよ。すばらしい。

青雲集

ボウリングのピンを弾きて夏休み 関 礼子

やさしく明快。明るい夏休み。白いピンが目に見え、愉しめばいい。それが最高。時間はその時のみ。二度と同じ体験はできない。栃木に熱心な作り手が増え、うれしい。

蟻姑におを付けてオケラと尊ばれ 西澤日出樹

愛称だろう。古人は手を合わせ愛くるしいさまを拝んでいとみたもの。俗説には一文なし、蟻姑の様をお手上げの姿と見たとも。蟻姑を身近に感じな感性が面白い。

現るは現るは車の駈出水後 山田 一政

秋田地域に集中豪雨来襲。大変でした。雪籠がひとつ道具や水掻くも同時作。四角い板囲いに棒をつけたものという。高野ムツオの震災での車詠を思い出すが、お悔やみのことばも出ない。祈るのみ。祈るのみ。

エスカレーター木乃伊を運ぶ如く夏 松岡 節子

デパートに溢れる木乃伊。暑さに疲れきって。それでも動かなければならない。エスカレーターも木乃伊運びとは大変。

夜濯のけはひ誰かのをるらしき 許勢 元貞

奥方が逝去された後の哀しみは癒しようがない。俳句を考えるのが最良ではないか。「夜濯」にはひそかに妻の気配がある。季語は、秘められた陰影にも普遍性が滲む。

好きなものだけしか見えぬ花栢榴 添田 朋子

その通りですね。好きなものがあれば幸せ。好きなものが視野から消える時にどうしたらいいか。好調な時に好きなものを沢山仕入れておくことでしょうか。花石榴が鮮やか。

立ち雲やB29に燕魚 柁木 幸子

作者は五十代から六十代にかけてダイビングの経験者。サイパン沖で、海底に沈んだB29に衝撃を受けたという。その

花びらの奥に隠る青蛙 春原 美恵

薔薇でも牡丹でも、花粉まみれの小さな青蛙を見たことがある。蛙はあそこで昇天しても幸せだろうなと思った。着眼に遊びがある。なんでもいい。どんだん詠まれたらいい。若さである。

白桃の毛細血管のくれなる 高瀬かず枝

美しい白桃の匂うような肌。皮一枚の下には毛細血管が張りめぐらされている。医学用語が「くれなる」の古風な色彩語によって品格と存在感を獲得する。表現の技である。

不時着の如く日陰に油蟬 蔵之内利和

油蟬は鳴いているのか、砂にまみれているのか。予定外の飛び方で日陰に着いた。「ジジイ」くらいは洩らしたか。鳥にでも追われたものであろう。気付きがいい。

岳集・青雲集から推薦候補作をあげる。

日本軍慰安所マップ下がり花 依田 ひろ

長母寺や枝葉の先に鳴く鶉 二木 暖

ずたずたの失恋に堪へ心太 小熊 旭

草蟬風の色して止まりをり 我妻 民雄

参禅のごと色鯉のひと屯 木村 安以

我武者羅に句に向き合へり遠花火 垂井 霜葉

夕焼に火の粉降りさう旭川 布山千土里

孟蘭盆会死者が生者を窘むる 荻上 憲治

山彦は少女の声か雲の峰 上條 忠昭